

歴史的な町並みが残されている一身田寺内町の中心には、専修寺の諸堂がひときわ高く堂々を並べています。特に如来堂と御影堂はいずれも高さ25mを超える国内有数の木造建築で、それぞれ昭和36年に国の重要文化財に指定されています。真宗高田派の本山である専修寺には、このほか県指定や市指定文化財になっている複数の建造物がありますが、今年5月に国が開催した文化審議会で、11棟の建造物を一括して重要文化財に指定することが適当とする答申が出されました。



ごびようからもん すまべい
御廟唐門と透塀



太鼓門

現在までの約350年にわたり整備されてきました。今回指定される11棟は、いずれもこの中で江戸時代から明治初期にかけて建立されたもので、専修寺の中心

今後、この答申のとおり指定されると、境内で重要文化財に指定されている建造物は如来堂・御影堂と合わせて13棟になります。市内では、この他に重要文化財に指定されている建造物は、美杉町太郎生の国津神社十三重塔（石造物）があるのみで、いかに多くの歴史的建造物が専修寺に残されているかが分かります。今回の答申では、県指定文化財であった唐門・山門・御廟拝堂・御廟唐門と、市指定文化財であった鐘楼・太鼓門だけでなく、文化財としては未指定となっていた通天橋・茶所・大玄関・対面所・賜春館などが含まれています。専修寺の現在の伽藍は、正保2（1645）年の大火による再建をきっかけに順次建立されたものです。津藩からの土地の提供を受け大幅に寺領を拡大した上で、寛文6（1666）年の御影堂落成から始まり、



梅雨の日々が続く毎日ですが、このような多数の歴史的建造物が間近に見られる専修寺と、その周りに広がる一身田寺内町の町並みを、この機会にゆつくり散策してみたいかがでしょうか。
（「広報津」平成25年6月16日号）